週刊 SSH（７月 14 日）

ＳＳＨ講演会（２学年）

東京理科大学　教育支援機構教職教育センター教授の渡辺雄貴先生をお招きして、講演会を実施しました。「データで拓く社会と科学コミュニケーション」と題して、データサイエンスを学ぶことはどのようなことか、AI が普及する現代においてデータを収集し、活用することの難しさについて、お話していただきました。膨大なサンプルから収集したはずのデータが無意識のうちに偏った対象から収集されている「統計的差別」の事例、AI の性能が向上する一方で、人間の「思考力」が衰えていく事例、教育現場など身近な場所における課題を AI がどのように解決しているのかなど、現代性に富み、生徒の知的好奇心を刺激する内容をご講演いただきました。他にも、産業構造や社会の価値観の移り変わりが激しい現代において、自らの進路をいかに考えるべきか、ということにも言及していただき、生徒たちは自らの将来を改めて考える１日となりました。以下は、受講した生徒たちの感想です。

特に印象に残っているのは AI の多才性です。AI は文章の要約、画像の認識、会話の生成、さらには人間の表情を読み取って感情を分析することまでできるということを知り、こんなにも幅広いことができるのかと驚きました。今の AI はまるで人間のように学習し、創造的なことまでこなす存在になってきていることに強い衝撃をうけました。その一方で、AI に頼りすぎた私たちの脳は空っぽになってしまうというのを聞いてぞっとしました。社会にどう影響するのか、どう使っていくべきか、正しく人間の責任が大きくなるという言葉が心に残っています。AI にすべてを任せるのではなく人間が使う、その仕組みを理解し、結果を受け止めて判断する力が必要と感じました。

偏りのあるデータから統計的判断をした AI を医療現場などで用いてしまったら大変なことになると思いました。すると、やはり人間の判断も必要になってくると思うので少し安心しました。

今の AI には様々な課題があってバイアスがかかってしまったりして正確でない場合があるので、ますます AI リテラシーが求められているし、AI にたよりすぎると自分の能力はどんどん下がっていくので AI と適切な距離を保って正しく人間が AI を利用する関係を保っていかなければならないと考えた。

（質問）AI が大学入試問題に挑戦するという研究があるが、現段階の性能でどのレベルの大学まで合格可能なのか？→（回答）MARCH と呼ばれる大学の入試問題であれば、合格可能な答案を作成できる。東京大学に合格できる答案を作成するのも時間の問題。ただし、AI は国語が苦手である。